第４４回日本学生経済ゼミナール関東部会
インナー大東文化大学大会
２００４年１１月２８日（日）　インナー大会

インナー大会報告書

部門名：財政学
テーマ：あるべき年金の歳入（ディスカッション）
サブテーマ：年金を中心として大きい政府かち小さい政府か（ディベート）
望月ゼミ代表：真田 博幸
参加者：久保 隆、石津 裕貴、西村 旭生、渡邊 賢一
篠原ゼミ代表：前田 一樹
参加者：小山田 園子、國府 美調、小島 剛、コン ニワッツ、白勢 綾、高橋 広行、名倉 秀一、平本 晃司、福田 瞳、松村 美希、矢澤 えみ子

論点

少子高齢化の急速な進展、経済の停滞、財政赤字など、現在日本の公的年金制度をとりまく環境は厳しさを増している。第一部では、このような状況の中で、年金の財源について、まずどのくらい足りないのかを話し合い、それを踏まえ年金勘定の均衡ということを１つの目途としてどのように均衡を達成していくかについて話し合いを行う。具体的には消費税と資産課税を中心とした。その中で、消費税におけるインボイス方式や、資産課税におけるリバースモーゲッジの扱いやミーンズテストの導入についてという問題が議論の中心である。

また、第二部では小さい政府、大きい政府にわかれディベートを行う。

総括

当日は第一部と第二部に分かれ第一部においては年金の財源として消費税、資産課税の妥当性について検討をし、国民年金の国庫負担引き上げ分に対応する部分をまかなう方法として、もともと国民全体の義務であるという観点から消費税が望ましいのではないかという意見に対し、最も賛同が集まったと思われる。資産課税についてはリバースモーゲッジについては共通の見解はなかなかでなかったが、ミーンズテストについてはやっても良いのではないかという意見に対し活発な意見交換が行われた。第一部の総括として、消費税の有効性は認められるが、公平という観点から疑問視する点や、逆進性という問題が残り、ここについては資産課税やその他の税金を組み合わせるべきだという方向となった。

第二部においては、篠原ゼミとしては年金財源を全て国庫負担で賄うべきであるという主張であり、望月ゼミとしては、現在の年金給付を若干下げるべきであり、あとは個人の選択に任せるべきであるとした。ここでは事前の話合いが詰まっていなかったので、議論

があいまいであり、結論のでないものとなってしまった。原因として、両ゼミにおける大きな政府、小さな政府という定義に対し認識において決定的な相違があったためであると考えられる。

全体的な評価として、もちろん当日における議論を通じ、多くを学ぶことができた。しかし、今回の成果として、望月ゼミとしては論文の議題を決めることから始まり、その役割分担、そして協調してチーム全体として１つのことに立ち向かうという姿勢ができたことは非常に意義のあることだったと思う。その過程においては全体の意見調整、班内でのコミュニケーションが決定的な役割を果たし、普段のゼミ活動において望月ゼミに足りないものを認識でき、さらに篠原ゼミさんという手本により一層成長する機会を得た。

また、インナー終了後に全員が本当に満足していたことは印象的であり、班員全員が班員の努力を素直に認め合えたことが今回のインナーの最大の成果だったと思います。